他の一部は政廳及警兵本部を占領することゝ定め、又た市外に在る其黨員及一味の徒は、警鐘の相圖を聞くと同時に諸種の交通機關を斷ち、殷んに全市を包圍威嚇するの手段なりしが、天は遂に彼等にのみ寵せず、陰謀將さに成らんとする實に數時間前、彼等の巨魁中の一人は事既に政府に洩れたりと報ぜり、因て彼等は事茲に至る何をか躊躇せん、宜しく迅雷耳を蔽ふに遑あらせず、現に政廳に執務せる大統領を捕ふべしと決し、巨魁連十數名及部下壯士約三百名は各自武器を懷にして政廳及警兵本部の二面に分れて進み、茲に血を見るに至りぬ、維れ五月二十九日午後二時を過ぐる僅かに數分なりとす。

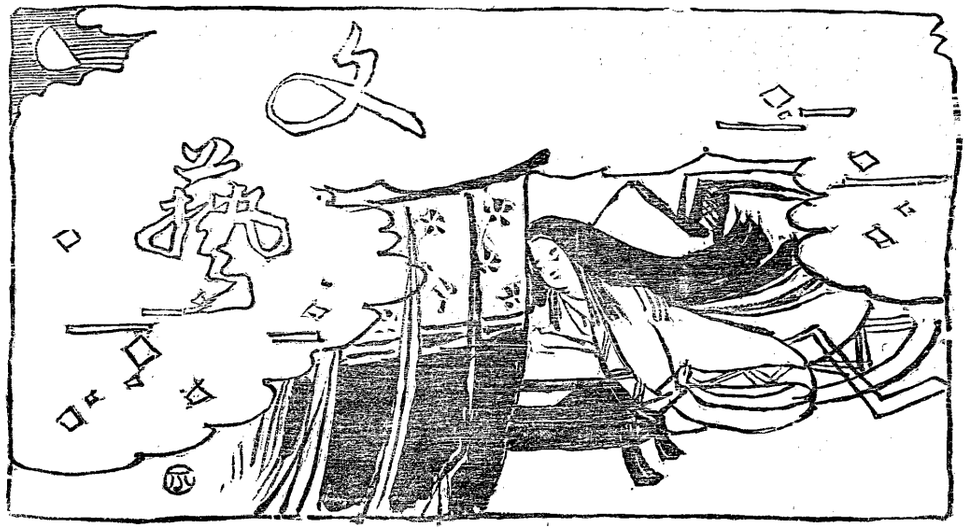
六　慘劇の顚末

暴徒は先づ政廳を襲擊し、大臣ロメロに逼りて軍隊指揮權交附の命令書に捺印せしめ、更に大統領に迫りて政權讓渡の文書に署名せしめむとて、種々の暴行を爲せしが、大統領は頑として應ぜざりき。暴徒は更らに引き出し、市中を引き廻し有ゆる侮辱を加へつゝインキシション公園に入り更らに文書に署名せむことを迫りしが、レギア大統領は毅然として應ぜざりき。此の時、參謀本部は、暴徒の蜂起を知り、直に軍隊を派遣し、該公園に於ける暴徒を猛烈に砲擊せしめたり。此の時、彈丸に當りて斃れたるもの、暴民市民等を合して二百餘名、園内に血流れ、草木に肉片附着して凄絶を極めたりしが、幸に大統領は無事なりき。

かくて秩序の恢復せられたるは、同時午後七時頃なりき。然れども戒嚴令は布かれ、嚴重に暴徒を逮捕せり。此の夜暴徒の巨魁たるヒエロラ（次男）ドユラン其の他二十餘名は捕縛せられ、翌日小ビエロラは瑞西領事館に潛伏せるを發見せられて、難なく捕へられき。然るに老ビエロラと其の長男の二人、これ眞の巨魁なるが、共に所在をくらまして、今尙ほ行方不明なり。或は傳ふ智利國に逃れたりと。かく暴徒の重立ちたるもの捕縛せられたるが故に、同日午後七時を以つて擧げらるべき謀は其の儘立消えとなり、市内は平穩に歸するを得たり。

此くの如き變亂の、一朝にして平定せられたるは、全く大統領レギアの剛膽不屈なりしに由る。彼れは暴徒の有ゆる脅迫の中に在り、泰然自若として其の權威を失はざりしかば、流石の暴徒も、手の出し樣にまごつき、遂に官兵の襲擊を蒙るに至りたる也。彼れにして若し其の苦痛を忍び能はざりしならば、變亂は更に大となりしならん。

大統領は本年四十七歳、體軀五尺二寸に滿たざる小男なれども其の膽力の大なる、胸量の寛宏なる、辯舌の流暢なる、眼光の烱々たる、實に大統領たる適材なるを知るべし。彼れ曾つて英國に留學し、英國紳士の氣風を體得し、節義を守ること頗る嚴なり。氏は日本人に對しては同情深く、恒に同胞のために便利を謀れり。卅二年二月、森岡商會の手にて本邦人八百餘名の彼地に赴きたるは、レギア氏の斡旋に待つ所甚だ多しとす。氏は此の事件に由りて益々す名聲を高めたり。



戲曲　家常茶飯

ライネル・マリア・リルケ作
森林太郎口譯

上卷

廣さ畫室。大窓の下に銅版の爲事をする卓あり。その上に爲事半ばの銅版と色々の道具とを置きあり。左手に畫架。その上に光線を遮る爲に使ふ枠を逆さにして載せあり。室の眞中に今一つの大いなる畫架あり。その脇に臺あり。それに色々の形をなしたる筆立に繪筆を立てあり。筆立の中には銅器にて腹のふくらみたるも交れり。繪具入になりをる小ささ簞笥。その上には色々の雜具を載せあり。その内に小ささ鏡、コニヤック一瓶、小ささコップ數個、紙卷莨を入れたる箱、菓子を入れたる朱色の日本漆器などあり。その傍に甚だ深く造りたる凭掛の椅子あり。凭りかゝる處は堅牢に造りありて、兩肱を持たする處を廣くなしあり。この椅子に向さ合せて、木部を朱色の漆にて塗りたる籐の椅子あり。奥の壁は全く窓にて占領せられをる。左手の壁に押付けて黑さ簞笥を据ゑあり。その上に髑髏に柔かき帽子を被せたるを載せあり。又小ささ素燒の人形、鉢、冠を置きあり。その壁には鉛筆畫、チヨオク畫、油繪等のスケツチを多く掛けあり。枠に入れたると入れざると交れり。前手に小ささ圓形の鐵の煖爐あり。その上に鍋類を二つ三つ載せあり。黑さ簞笥の傍に、廊下より入り來るやうになりをる入口あり。右手の壁の前には、窓に近さ處に寢椅子あり。これに絨緞を掛く。その上には又金糸の繡ある派手なる帛を擴げあり。この上の壁は中程を棚にて横に仕切りあり。そこまで綠色の帛を張りあり。その上に數個の

額を掛く。小さき寫眞の上を生花にて飾りたるあり。棚の上には小さき、柄の長き和蘭陀パイプを斜に一列に置きあり。その外小さき彫刻品、人形、浮彫の品等あり。寢椅子の末の處に一枚戸の戸口あり。これより寢間に入る。その傍に、前へ寄せて、人の昇りて立つやうにしたる臺あり。その半ばを屏風にて隱しあり。臺の上には緋の天鵞絨に金糸の繡ある立派なる帛を投げ掛けあり。ずつと前に甚だ大いなる卓あり。これは爲事机に用ゐるものにて、紙、文反古、書籍、その他色々の小さなる道具を載せあり。その脇に書棚ありて、多くは淡りしたる色の假綴の本を並べあり。

○この畫室は町外にあり。時刻は午少し過ぎたる頃なり。窓の外には鼠色の平なる屋根、高き春の空、靜に搖ぐ針葉樹の頂を臨む。○畫家ゲオルク・ミルネル。丈餘り高からず。二十四歳ばかり。ブロンドなり。髮は柔かく、小さなる八字髭を生やしゐる。黑のフロックコオトに黑のネクタイ。服は着たるばかりなりと覺しく、手にて皺を熨すやうに撫て、埃を拂ふやうに叩きつゝ、寢間の戸を開けて登場。斯く服をいぢりて窓の處まで行き暫く外を見て、急に向き返り、部屋の内を、何か探すやうに、歩き廻る。さて繪具入の簞笥の上の鏡を見出し、それに向きてネクタイを直さんとし、鏡に五味のかゝりゐるを見て、じれつたげに體を動かし、ハンケチを見出し鏡を拭き、そのハンケチを椅子の上に投ぐ。さて鏡を手に取り、ネクタイを直す。

畫家。これで好い。（安心したるらしき樣子にて二三歩窓の方に行き、懷中時計を見る。）なんだ。まだ三時だ。大分時間があるな。（繪具入の簞笥の處に立戻る。この簞笥は高机の半分位の高さになりをる。その上に前にある紙卷莨の箱を手に取り、小言のやうに。）五味だらけだ。何を取つて見ても五味だらけだ。（紙卷を一本取る。○戸を叩く音す。）何んとも思はぬ樣子にて。）お這入んなさい。（マッチを探す。やうやマッチの箱を見出し、マッチを一本取りて摩る。又戸を叩く音す。うるさがる樣子にて。）お這入んなさい。（その内マッチの火消ゆ。燃えさしを床の上に投げ、又一本摩り、莨を吸付けながら、どうでもいいといふやうなる風にて戸の方を見る。○モデル娘。質素なる黑の上着に麥藁帽子の拵にて、遠慮らしく徐に入り來る。畫家はマッチを振りて消す。）モデルか。入らない、入らない。また來てお呉れ。（モデルの方に背中を向け紙卷を喫む。）

モデル。先生。わたしですよ。

畫家。（急に向き返る。）何んだマッシャかい。見違へてしまつた。黑なんぞ着てゐるもんだから。どうしたんだい。

モデル。只、どんな御樣子かと思つて。

畫家。さうか。大分長く顔を見なかつたなあ。近頃どうだい。

モデル。ええ。どうやらかうやらといふやうな工合ですよ。この頃はわたし共に御用はおありなさらないの。

畫家。うむ。この頃はお休だ。どうだ。少し掛けないか。

モデル。でもお出掛でせう。

畫家。『なぜ』

モデル。（畫家の衣服を指さす。）そんなお仕度で入らつしやるぢやありませんか。

畫家。これかい。そりやあ出掛けるには出掛けるのだが、まだ早い。まあ腰でも掛けないか。近頃は忙しいかい。

モデル。（進みて藁椅子に腰を掛く。畫家は今一つの低き椅子の背に腰を半分掛く。）いゝえ。どなたも何んにもなさらないやうですわ。

畫家。（微笑む。）それ見ろ。己だつて同じ事だ。

モデル。（やはり微笑む。）それで毎日毎日何をして入らつしやるの。

畫家。フロックコオトに御奉公をしてゐるのだ。斯ういつては分るまい。人の處へ訪問に出掛けたり、人に案内をして貰つたりしてゐるのだ。

モデル。急にそんな事が面白くお成りになつたの。

畫家。いや、面白くも何んともありやしない。

モデル。それなのにどうしてそんな事をして入らつしやるの。

畫家。ふん。自分の爲に面白い事が出來なければ爲方がないぢやないか。

モデル。おかきなされば好いでせう。

畫家。それがかけないのだ。

モデル。かけないのですつて。

畫家。うむ。

モデル。嘘だわ。冬なんぞは。

畫家。そりやあ冬は違ふさ。十一月頃の薄暗い天氣の日に、十一時頃になつても光線が足りない時なんぞは、どんなにか氣を揉んだものだ。惡くすると一日明るくならずにしまふのだからな。あの頃もつと勉強して置けば好かつた。あの頃かけば幾らでもかけたやうな氣がしてならない。この頃は、朝早くから窓一ぱいの光線が差込む。それを使はずに見てゐるのが癪に障るので、己は晝まで寢部屋の中に寢てゐるのだ。

モデル。それには夜遲くお歸りなさるせいもあるでせう。（間。）

畫家。（眞面目に。）成程。そりやあ遲く歸るせいもあるだらう。うむ。人間は氣保養もしなくてはならないからな。

モデル。えゝ。保養をなすつて、それから爲事におかゝりなさるが好いわ。

畫家。なんだ。妙に己に意見をするやうな事をいふなあ。

モデル。（間の惡氣に。）そんな譯てはございませんが、ふいとさう思つたもんですから。それに詞のはづみですわ。

畫家。詞のはづみばつかりかい。何んだかお前は厭に賢夫人らしくなつたぢやないか。

モデル。（笑ふ。）全く詞のはづみて。（間の惡氣に言ひ淀む。）

畫家。どうだい。お前は何か稽古なんぞをした事があるのぢやないか。

モデル。一向出來ませんわ。すこおし讀め出すと内が大なしになつてしまつたもんですから。

畫家。急に貧乏になつたのかい。

モデル。えゝ。出し拔けでしたの。お父さんが相場をして。

畫家。さうかい。それぢやあ讀めば讀めるのだな。

モデル。えゝ。讀めますわ。小さい時にはお父さんの本棚の前に行つて、見てゐまして、これが讀めたらと思つてゐたのです。それから讀めるやうになつたら。

畫家。ふん。讀めるやうになつたらどうしたのだ。

モデル。その時はもう本なんか無くなつてゐましたの。

畫家。さうかい。みんな差押へられてしまつたのだな。

モデル。えゝ。

畫家。その後どうしてゐるのだ。

モデル。斯うしてゐますわ。（打奏れたる樣子。）

畫家。そこいらにある本で好いなら、いつても持つて行くが好いぜ。（本棚を指さす。）

モデル。難有うございます。いつか中も願つて見ようかと思つてゐましたの。（間。）

畫家。格別冊數はないが、あの中にても何かしらあるだらう。（間。）何んだつてそんなに己の顏を見るんだい。

モデル。あなたは丁度いつか中のやうな御樣子で入らつしやるわ。

畫家。いつか中とはいつだい。

モデル。あの盛にかいて入らつしやつた十一月頃と同じやうな御樣子に見えますの。

畫家。あのかけた頃のやうに見えるといふのか。ふん。一體どんな顏だい。

モデル。さうですねえ。何んといつたら好いでせう。かう敬虔なやうな。

畫家。なんだと。

モデル。いゝえ。さうではないわ。さういつては當りませんの。

畫家。そんならどうだといふのだ。

モデル。さうね。作業熱のあるお顏ですわ。

畫家。（紙卷を灰皿に押付けて消す。）ふん。作業熱のある顏といふのは、どんな顏だい。

モデル。（徐に。）信仰のあるやうな顏ですわ。

畫家。（眞面目なる顏にてモデルをぢつと見る。モデル立ち上る。）今日の己の顏はそんな風かなあ。

モデル。えゝ。（間。）

畫家。（間。○微笑む。）さうして見ると近い內に又お前に來て貰はなくつちやあ成らないやうになるだらうかな。

モデル。（喜ばし氣に。）いつでも參りますわ。

畫家。（たゆたひつゝ。）ふむ。事によつたら。（神經質なる態度にて、あちこち歩き始む。）事によつたらやられるかも知れない。考はとうから幾らもあるのだ。只片つ方の奴をつかまへようとすれば外の奴が邪魔になる。でもどうかすると妙なことがある。先の週だつけ。雨の降つた日がもう少しで暗くならうといふ時だつた。かう見るものが昔話のやうに、黃金色に見えたつけ。地が溫かに、重いやうで。背景が。そしてその前にあるものが、光つて、輪廓がはつきりして、恐ろしく單純に見えたつけ。妙に情を動かすやうに單純に見えたつけ。さうだ。前の週の木曜日だつたと思ふ。あんな時に直ぐかき始めれば好いのだが。つひそんな時にいろんな事を考へるもんだから。

モデル。外の事が邪魔に這入るのでせう。不斷の下らない事が。

畫家。（立ち留りてモデルを見る。）お前のいふ通りだ。その內呼びにやるぜ。

モデル。あしたはどうでせう。

畫家。あしたかい。あんまり性急だなあ。あしたはむづかしい。第一今夜は歸が遲くなるのだ。それにこの部屋も一度大掃除をしなくちやあ。まあ、この埃を見てくれい。（モデル娘急がはし氣に帽を脫ぎ、上着を脫ぎかゝる。）どうするのだ。

モデル。お掃除をしますわ。拭巾があるでせう。

畫家。直に始めようといふのか。

モデル。造做はありませんわ。拭巾があるならお出しなさいよ。

畫家。せつかちだなあ。（その內娘は左手の箪笥を開け探す。畫家繪具入の下の抽斗を拔き出す。）こゝだ、こゝだ。（抽斗に在る艶拭巾を二枚出して投げ遣る。娘は直に箪笥を拭き始め、その上の品物を一々拭きて工合好く据直す。畫家は紙卷を一本吸付け、窓を背にして、銅版の置きある机に寄りかゝり、娘のする事を見てゐる。）

モデル。（一方の畫架の處に膝を突き、掃除をしつゝ徐に。）今度おかきになるものには顏のがお入用なのではないでせうか。顏の役に立つモデルが。

畫家。なぜ。（煙を喫む。）

モデル。（立ちて左手の壁の額を掃除す。）わたしでは手と足しきやお役に立たないのですもの。（畫家は娘を見てゐる。娘は畫家が返事をせざる故向き返り顏を見る。畫家は突然紙卷を投げ捨て、畫架に飛付く。）

畫家。ぢつとしてゐろ。動いちやあいけないぞ。（娘はその姿勢を崩さずにゐる。畫家は畫室をあちこち駈け廻り枠なぞを倒し、紙の張りある板何枚かをひつくり返して、その一枚を畫架に載せ、箪笥を引開け、チヨオクの入れある箱を取出し、大急ぎにてかき始む。爲事に熟中しつゝ。）それで好い。手はそのまゝ垂らしても好い。（フロックコオトの上着を脫いで床の上に投り出す。娘は姿勢を保ちゐる。畫家は爲事を續く。）手はどうでも好いのだ。顏さへさうしてゐて貰へば好い。（娘は驚の餘りに痲痺したる如き樣子にて兩手を後に引く。畫家は詞無く、爲事を續く。娘、突然激しく感動したる樣子にて兩手にて顏を覆ふ。）おい。どうしたんだい。爲樣がないなあ。もう駄目だ。（娘泣く。畫家チヨオクを投ぐ。）えゝ、くそ。もう駄目だ。

モデル。（驚きたる樣子。）御免なさいよ。わたしはつひ。（兩手を顏より放して元の姿勢に返る。）

畫家。（憤然として。）さうしてゐさへすれば好かつたのだ。なんだつてあんな眞似をしたのだい。

モデル。（ひどく間の惡氣に。）本當に御免なさいよ。つひ。

畫家。そんな顏になつちやあ爲方はありやしない。今日はもうおしまひだ。（娘は悲し氣に立ちゐる。）おしまひだといふぢやあないか。（板を壁にがたりと寄せ掛く。さてチヨオクのみになりたるに心付き、床の上にある上着を取上げ着る。娘、傍に寄る。）なんだ。

モデル。（間の惡氣に。）お服が五味だらけになりましたわ。

畫家。そんなら、掃いてくれい。（娘、ブラシを探す。畫家卓を指さす。）あそこにある。（娘、ブラシを持ち來て服を掃く。間。○戶を叩く音す。畫家高聲に。）お這入んなさい。

畫家の姉。（戶を少し開けて透間より。）好いの。

畫家。姉さんですか。

姉。えゝ。わたしよ。

畫家。お這入んなさい、お這入んなさい。（モデル娘は服を掃く手を止め、氣を置くやうに戶の方を見る。○ゾフィイは老けたる處女なり。質素なる拵へにて登場。髮は眞中より右左に分けゐる。容貌美ならず。されど柔和にて目付賢氣に情あり。萬事察しの好き風なり。後の戶を締め、モデルを見てたゆたふ。）好いからずつとこつちへお出でなさいよ。これがマッシャなのです。そら。好く姉さんに話したでせう。令服の五味を取つて貰つてゐた處です。今日はマルリンクの處へ午餐に呼ばれましたので。

姉。（進み入る。ちよいちよい覗いて見ようと思ふのだけれど、つひ御無沙汰になつてね。（モデル娘に。）今日は。（握手せんとす。娘は意外に思ふらしく慌てゝそつと手を出し、一秒間程相手の手を握

る。貴夫人の己れと握手する事はあり得べからざるやうに思ひをるゆゑ驚きしなり。さて、艶拭巾を取りて、繪具箱筒の抽斗の、まだ開けある中にしまひ、忙がはしく上着を着る。）どこへ呼ばれてゐるのですつて。

畫家。（手眞似にて姉に、寢椅子を指さし示し、自分も藁の椅子を傍に持ち行き、腰を掛く。）マルリンクの處なのです。

姉。（寢椅子に腰を掛く。）あそこの内では今日よめさんが來るのだといふてはありませんか。

畫家。（半ば見物に背を向けて藁椅子に腰を掛く。）それなのです。儀式には厭だから行かないが、午餐だけは斷るわけにも行かないものですからね。息子は近頃隨分親しくしてゐるのですから、斷ると感情を害しますからね。それに午餐といつても極近い親類や友達の外は呼んでないのださうです。それで燕尾服にも及ばないといつて來た位です。姉さんは近頃どうしてゐるのですか。みんな健康ですか。おつ母さんは。

姉。（微笑む。）實はおつ母さんが樣子を見て來いといつたから來ましたよ。三日ばかりお前さんが顏を見せないもんだから、心配をなすつてね。それにゆうべ夢に見たから、何事かありやしないかといふのですよ。年が寄つて病氣だもんだから、迷信家になつてしまつて困りますの。（間。）上元氣のやうね。

畫家。さうですよ。慢性怠惰病といふ病氣は別として。

姉。（微笑む。）まあ、その病氣なら命に別條はないでせう。

畫家。（眞面目に。）さうさ。併し或意味に於いては人を死なすかも知れません。（間。）おつ母さんには、今からマルリンクの處へ呼ばれて行く處だつたとさう言つて下さい。マルリンクの處ではない。歐羅巴ホテルです。宴會はホテルであるのです。一體おつ母さんは何をしてゐますか。

姉。やつぱりいつもの通りですよ。ちよいと。マッシャさんが何か用があるのでせう。（モデル娘の方を顏にて示す。娘は上着を着、帽を被り、何か用あり氣に戸の近くに立ち留りゐる。）

モデル。いえ。只お暇乞を致さうと存じまして。

畫家。（少し腰を上げ、半ば向き返る。）好い好い。又來て貰はう。

姉。左樣なら。

モデル。左樣なら。御ゆつくりと。（退場。）

姉。あれが名高いマッシャなのね。

畫家。（何か物を案じゐて、氣のなき返事をなす。）えゝ。あれがマッシャです。

姉。去年の十一月に、あの大きい畫をかいてゐる頃、わたしに、色々話してお聞かせだつたのね。

畫家。（突然立ち上る。）姉さん。ちよつと御免なさいよ。

姉。えゝ。

畫家。（忙がはし氣に戸口に行き、戸を開け、外に向きて呼ぶ。）おい。マッシャ。（間。梯子を下り行く足音留る。）マッシャ。

モデル。（梯子の下より。）えゝ。只今。（急ぎ足にて梯子を登る音す。さて、戸の外まで歸り來たる樣子なり。）

畫家。さつきの事はなあ、己は何んとも思つてはゐないよ。いゝかい。

モデル。（梯子を駈け登りしため、息を切らしゐる樣子。）本當にあんまり出し抜けだもんですから、吃驚しましたのと、それにわたしは耻かしくつて。

畫家。なに。耻かしかつたのだと。何んだ。馬鹿らしい。だが好いよ。かきかけたスケッチはあそこにあるし、己の頭の中には印象がはつきりしてゐるのだから。ぢやあ明日來て貰はう。

モデル。（思ひ掛けぬ喜びの樣子。）あの明日參つても宜しいのですか。

畫家。（徐に。）うむ。午前八時か九時頃に來て貰はう。來られるかい。

モデル。えゝ、えゝ。

畫家。それで好い。左樣なら。（戸を閉ぢて忙がし氣に歸り來て、姉に。）姉さん。濟みませんでした。少し言ひ殘したことがあつたもんですから。

姉。大相勉強するのね。明日八時からかくなんて。

畫家。なあに。どうなるか分りやしない。只やつて見るのです。マッシャが僕に諫言をしたといふやうなわけで。はゝゝ。それはさうと姉さんはマッシャに握手をしておやりなさいましたね。大變喜んだやうでしたよ。

姉。そりやあお前の話に好く聞いてゐたんだから、古い知合のやうなんだもの。去年の冬、いろんな事を聞いたのでせう。まあ、あたりまへのモデルとは違ふのね。

畫家。そりやあ違ひます。

姉。だが、別品ではありませんね。

畫家。僕は別品だなんといつた事はないでせう。

姉。（微笑む。）それはありませんとも。それにわたしは丁度あんな風な子だらうと思つてゐましたの。眞面目な、靜な顏付で、色艶が餘り好くなくつて。口は何事も堪へて默つてゐるといふ風な、美しい口なのね。額と目とには氣高い處がありますね。目なんかは丁度あんな風だらうと想像してゐましたの。

畫家。（詞急に。）さうでせう。面白い目です。あの目に今日氣が付いたのです。（間。）その外の事も姉さんの思つてゐる通りかも知れません。（姉は弟の詞を解し兼ねたる如く、顏を見る。）僕のいつたのは、あの娘の心も顏もあんな風かも知れないといふのです。（間。突然。）さうさう。あのロイトホルド君が今に來るのですがね。姉さんはこゝて顏を合せるのが厭ではありませんか。

姉。いゝえ。わたしは構ひませんの。

畫家。でもあんなに熱心に、姉さんをおよめに貰はうとしてゐたのを、姉さんが彈付けたのですから。

姉。なあに。ちつとも事を荒立てずに斷つたのだから、わたしはこゝで逢つたつて、困りませんの。それにあの方はもう内へは來られないでせう。おつ母さんが變に思ふから。昔風の人の考では、結婚の話を爲掛けて、話が破れてしまつたものは、それからどんな風にして交際をして好いか分らないんですからね。併しわたしの考では、そんな風に、因襲がどうにも極めてゐない場合が、却て面白い關係になるかも知れないでせうと思ひますの。さうではないでせうか。

畫家。こりやあ面白い。ふん。因襲の外に立つた關係は面白い。僕なんぞも、さういふ關係を求めゐるやうなものでゐるのです。

す。

姉。人生といふものが、さうしたものではないでせうか。

畫家。ふん。

姉。一體人間の眞實の交際はみんな因襲の外の關係ではないてせうか。

畫家。姉さんは實に面白い人ですね。

姉。笑談は置いて、わたしがかうやつてこゝへ來るのなんぞも、同じ道理かも知れないてせう。

畫家。姉さんが僕の處へ來るのですか。そんなら僕が弟でなくつても、姉さんはこの畫室に來るてせうか。

姉。さうね。きやうだいでないとして見ると、何んといふ資格で來たら好いてせう。

畫家。只貴夫人として、知合として、友達として。

姉。友達ですか。

畫家。えゝ。友達になつて來て下さるか、どうだか怪しいものですね。

姉。（笑ひつゝ。）お前の處へなら來るてせうよ。

畫家。（やはり笑ひつゝ。）まあ、來て下さるものだと思つて置きませうよ。（間。眞面目に。）本當に姉さんが來て下さると好いのだが。

姉。（解せざる樣子。）えゝ。

畫家。實は僕は寂しくつて爲樣がないのです。こなひだから姉さんの處へ越して行かうかとも思つて見ました。たしか客間が一つ明いてゐたてせう。それともこゝで寂しいと思ふのは、あんまり家が廣過ぎるせいかも知れません。兎に角姉さんとお母さんと僕と一しよに住つて見るといふ事が、出來ない事もあるまいと思ふのです。晩にでもなれば誰か本でも讀んで、みんなでそれを聞いたつて好いでせう。燈を點けて本を讀むのが目に惡けりやあ、話をしてゐたつても好いでせう。事によつたら默つてゐたつて一人で默つてゐるよりは好からうぢやありませんか。實際僕は折々そんな風にみんなと一しよになつてゐるやうな心持になるのですよ。（疑念を挾むらしき姉の目付を見て言ひ淀む。）ふん。

姉。お前がそんな風に一しよにゐる處を想像するのは、わたし共と一しよといふわけではなくつて、誰か外の人と一しよにゐるやうな夢を見てゐるのではあるまいかね。

畫家。（驚きたる樣子。）姉さん達と一しよでなくつて、誰と一しよにゐる事が出來るでせうか。

姉。それはお前はお前で因襲の外の關係が出來るかも知れないぢやないか。

畫家。（手にて拒む如き振を爲し、暫く間を置き、溫かに。）僕は幾らか姉さんの助になりたいと思ふのです。

姉。（甚だ意外に思ふらしき樣子。）何んですつて。わたしを助けるのですつて。

畫家。でも姉さんが、朝から晩までお母さんに付いてゐて世話をするのは、隨分苦しいでせう。長年の事だから。何んでも年寄といふものは、どんなに世話をしても、それを難有いなんぞと思つては呉れないものです。それに病氣でもあると、癇癪を起して無理な事もいふでせう。隨分つら

からうと、僕だつて察してゐますよ。

姉。お前がさうお言ひなら、わたしは打明けてお前に言ひませうがね。實はわたしがお母さんの世話をするのも、因襲の外の關係なので、わたしは生涯をその關係に委ねたといふものかも知れませんよ。（畫家不審らしき顏を爲す。姉は沈みたる調子にて言ひ續く。）實はね。お母さんといふものには、とうに別れてしまつたかも知れないのですよ。そしてわたしは或緣のない人に出くはしたのね。その人が人手を借らなくつてはどうする事も出來ない、可哀相な人だもんだから、わたしはその人に世話をしてやつて、その人の爲には、わたしがゐなくなつては、どうもならないやうな工合になつたのね。晩方に窓壓を締めてやれば、その人の爲には夜になり、午前に窓の鎧戸を明けてやれば、その人の爲には朝になるでせう。物を喰べさせるのも、藥を飲ませるのもみんなわたしの手でするのでせう。わたしの本を讀んで聞かせる聲に賺されて、寢る時は寢るでせう。さういふ風にその可哀相な人はわたしに便るのだから、わたしは又その人の助になるのを自分の爲事にしてゐるのです。それが今お前に言はれて見れば、わたしのお母さんなのね。

畫家。（姉の方へ手を差伸べて、溫かに。）えゝ、それがお互のお母さんだといふわけですね。

姉。（弟の手を握りて、互に目を見交す。○間。）こんな事をいつてぐづ〳〵してゐてはお母さんが待遠に思ふてせう。

畫家。それではロイトホルド君には逢はないで歸るのですね。

姉。さう。あんまり遲くなるからね。（間。）あの人は度々お前の處へ來ますの。

畫家。なにあんな風で、交際好といふわけてはないてせう。それだからめつたには來ないが、今日は誘ひに寄るといつてゐたのです。

姉。マルリンクの一家とも附合つてゐると見えるね。

畫家。さうさね。マルリンク男爵の友人といふよりは、息子のロルフの友人といつた方が好い位でせう。時代が違つて男爵とは話が合ひさうもないのですから。

姉。さうでせうとも。この頃のやうに人の思想が早く變ることはないのだから。

畫家。實にさうです。勿論青年社會の思想といふのは。（戸を叩く音す。）はてな。ロイトホルド君かも知れない。お這入んなさい。あゝ。さうだつた。

醫學士ロイトホルド。（登場。痩せて背の高き男。）もうそろ〳〵出掛けても好いでせう。（ゾフィイを見て、暫くは近眼の爲に、誰とも見分ず忽ちそれと知りて。）いや。失禮しました。御機嫌よろしう。

姉。（醫學士に進み近付き握手せんとす。）暫くでございましたね。只今弟と、あなたなんぞは舊思想の人だらうか、新思想の人だらうかと、お噂をいたしてゐたのでございます。

學士。（ゾフィイと握手す。次に畫家と握手し、鼻眼鏡を外しつゝ。）どつちでもありませんよ。強ひてどつちかに入れなければならないとなりますれば、舊思想の方へ入れてお貰ひ申しませう。わたくしなんぞの考では、一體新思想といふものが、もう纏つて出來てゐるかどうだか、も少し待つて見なくては分

らないと思ふのですから。

姉。へえ。なぜでございませう。

學士。わたくしの考では、破壞せられた舊思想が、隨即新思想だとは認められないやうに思ふのですよ。

畫家。それでも君も舊思想が取片付けられてしまふといふことだけは認めてゐるのですね。

姉。そしてそれを取片付けるのが當然だといふことも認めて入らつしやるのでせう。

學士。さうなると、一度にはちつと問題が大さ過ぎますね。事によつたら骨を折つて舊思想を破壞するのも徒勞ではないかと思ふのです。なぜといふのに、折角舊思想を取片付けてしまつても、その跡の、石瓦に覆はれた地面の上には、新思想は芽ざして來ないかも知れませんから。新思想の生えて來るには、何處か別に新しい地面が入るのではないでせうか。

姉。それではあなたは、この世界にまだどこか人の手の觸れない新しい土地があるやうに思つて入らつしやいますの。

學士。えゝ。もし人の手の觸れない土地がもうないといふ段になれば、それは新しい土地が海の中から湧き出ても好いでせう。

畫家。君は詩人ですね。

學士。さうですね。詩人なら、君なんぞの讀まない舊派詩人ですせう。

畫家。いや。僕は新派も舊派も讀みませんよ。妙な工合で、僕も誰かの句が氣に入つて覺えてゐることはあるのです。

それがロオマンチックの詩人であつたり、デカダンであつたりするのです。佛蘭西、伊太利、獨逸、露西亞、どの國のものだか分らなくなることもあるのです。氣に入つた句は、どの詩人のでもみんな一人で作つたものゝやうに、僕には思はれるのです。

學士。そりやあ、それも一理ありますよ。どの詩人の背後にも唯一の詩人がゐるのですから。

畫家。ふん。神だといふのですか。

學士。君はそれを神と名付けますか。

畫家。（答へに窮する樣子。）僕には分りませんなあ。（間。）

學士。（時計を見る。）併しもう時刻が。

畫家。（目の覺めたる如く。）さうださうだ。もう遲くなる。君、車が下に待たせてありますか。

學士。待たせてありますよ。

畫家。それぢやあ、ちよつと腰を掛けて待つてゐて下さい。姉さん。ロイド君にその紙卷の箱を上げて下さい。箱のある處は分つてゐるでせう。僕は直ぐ來ますから。

姉。（急ぎて腹掛に入る。）（凭掛りの椅子を示す。）どうぞお掛けなすつて。お莨を上りますか。

學士。いえ。只今は頂戴いたしませんすまい。食事前ですから。

（ゾフイイは藁椅子を持ち來て腰を掛く。學士はその椅子を自分にて持ち來らんとして馳せ寄る。）御免下さい。うつかりしてゐました。

姉。どう致しまして。わたくしはいつも自分の體の事は自分で致すのですから。（藁椅子に腰を掛く。學士は椅背に寄りかゝらず

に、背を眞直にして腰を掛く。○間。）あなたはマルリング家とお心易くして入らつしやいますの。

學士。さうですね。古い知合といふ程度ですよ。年を取つた男爵は、わたくしの醫者としての職業上で、餘程前からわたくしと交際してゐられるのです。それから今度嫁に來られるお嫁さんのお里もわたくしは知つてゐます。

姉。それでは御緣組のある兩家ともお知合なのですね。それなのに儀式には入らつしやらなかつたのですか。

學士。いや。わたくしは婚禮の席へ行くのは大嫌です。

姉。氣味の惡いやうにお思ひなさるのでせうか。

學士。さうですね。何んだか斯う角立つて、大業に見せるのが不愉快なのです。

姉。それではあなたのお考では、婚禮といふものは、こつそりいたした方が宜しいのですね。

學士。えゝ。成るべく目に立たないやうにしたいものです。葬の方なら、少しは盛大にしたつて好いのです。死人を嫉むものはありませんから。

姉。それはさうでございますね。死人なら誰も嫉みは致しますまい。さういふお心持は分りますわ。

學士。どうお分りですか。

姉。あなたは生活がお好なのでせう。

學士。（微笑む。）兎に角生活してゐますよ。

姉。それだけで澤山です。兎に角あなたは舊思想の方ではございませんのね。

學士。（微笑む。）それでは舊思想の人は生活してゐないと仰やるのですか。

姉。（たゆたひつゝ。）それは同じ生活してゐるといつても違ひますわ。

畫家。（外套を着、手に帽と手袋とを持ち登場。）（學士立つ。）

姉。遲くなりはしなくつて。

畫家。なあに。四五分で行かれるのだから。

姉。（學士に。）そんなら、御機嫌宜しう。もつとお話が伺ひたかつたのですが、爲樣がございませんね。事によつたら又こゝで偶然お目にかゝられるかも知れませんね。

學士。そんな偶然な事があつても、あなたは御迷惑ではございませんか。

姉。いゝえ。どう致しまして。それに偶然といふものもつまりは法則があつて出來るのではございますまいか。

學士。それではあなたは法則といふものを尊んで入らつしやるのですね。

姉。或法則には服從しますわ。言つて見れば。

畫家。言つて見れば、友誼の法則なぞがそれですね。（學士と握手せんとす。）

姉。言つて見れば。

學士。（十分の敬意を以て、ゾフイイの手に接吻す。）今日は色々お話を承つて爲合せを致しました。

姉。それではそのうち。

學士。えゝ。又お目にかゝりませう。

畫家。まあ、兎に角梯子段の下までは一しよに行きませう。

さあ。（戸を開き、姉と學士とを出しやり、自分も續いて、退場。○舞臺は一二分間空虛になりをる。さて外より戸を開け、先にモデル娘、續いてエベルの上さん、帚、バケツ、雜巾を持ち、登場。）

モデル。（快活に。）さあお上さん。家番のをぢさんが鍵は持つてるだらうと思つたが、その通りでしたね。構はないからお這入りなさいよ。（手早く帽とジャケツとを脱ぎ捨て、大いなる白の前掛を取出して掛く。）大急ぎでやらなくつちやあ、駄目ですよ。まだ二時間は日があるでせう。そのうちにあらまし片付けてしまはなくちやあならないからね。さあ。この煖爐の處から始めて下さいよ。

上さん。（のろのろと。）はい、はい。もう大分遲いからね。それに隨分廣い部屋だ。一體あしたの朝ゆつくりにした方が好かつたのに。

モデル。（じれつた氣に。）そんな事をいふのではないよ。あすの朝は綺麗になつてゐなくつちやあならないのだから。

上さん。（襷を掛く。）成程ね。（掃除道具を運ぶ。）あしたは御祝儀でもあるのですかい。

モデル。（さつさと爲事にかゝり、卓の上を片付けつゝ、にこやかに。）えゝ、えゝ。あしたはお目出たい日なのよ。（幕。）

下卷

翌朝。畫家は樂氣に凭掛の椅子に掛り、莨を喫み、珈琲を飲み、スケッチの手帳を繰擴げ、見てゐる。戸を叩く音す。

畫家。お這入んなさい。

モデル。今日は。

畫家。マッシヤか。這入れよ。（モデル急がし氣に入る。畫家はやはりスケッチの手帳を引繰返しつゝ。）爲事は今日は駄目だよ。

モデル。（驚きたる樣子。）おや。

畫家。（微笑。）實際駄目なのだ。それとも己の顏はやつぱり作業熱のある顏に見えるかい。

モデル。さうではありませんけれど。

畫家。處で。

モデル。兎に角愉快らしい顏をして入らつしやるわ。

畫家。そりやあさうさ。愉快な事があつたのだ。

モデル。きのふ。

畫家。うむ。しかも遲くなつてからだ。思ひかけない事もあるものさ。

モデル。そんなにお嬉しい事なの。本當でございますか。

畫家。うむ。本當だよ。

モデル。わたしの骨折なんかは、なんでもございませんわ。（畫家は何んの事か、分らぬらしく、娘の顏を見る。娘は間の惡氣に。）何んでもございませんの。今日はお爲事におかゝりなさいますかと思ひましたので。

畫家。そこで。

モデル。お部屋を綺麗に致しましたの。併し造做もない事でしたわ。

畫家。（驚きて四邊を見廻す。畫室の塵一本もなきやうに綺麗に掃除しあるに心付く。）うむ。成程。

モデル。ちつともお氣がお付きなさらなかつたの。

畫家。（娘の顏の甚しき失望を表はせるに心付きて、詞急に。）うむ、う

む。お前の掃除をしてくれたのも思ひかけない事には相違ないのだ。よくやつてくれた。難有いよ。

モデル。（畫家の方に背中を向け、餘所餘所しく。）どう致しまして。

畫家。丁度好かつたのだ。今日は愉快な事があるのだから。

モデル。それではいつぱりお始めなさいますの。（畫家の方へ向き直る。）

畫家。爲享なんぞはしない。お客があるのだ。

モデル。え。

畫家。或貴夫人が見えるのだ。

モデル。え。

畫家。お孃さんだ。

モデル。その方をおかきなさるの。

畫家。さうさね。かくかも知れないよ。（思に沈む。）實にきのふ程妙な日はない。お前の事だから、話して聞かせよう。お前は急がしくはないのだらう。

モデル。いゝえ。別に用事はございませんの。

畫家。そんなら腰でも掛けないか。（娘はやはり立ちゐる。）まあ、考へて見ても知れるだらう。宴會なんといふものは隨分つまらないものなのだ。儀式張つてゐて、退屈で。おまけに婚禮の宴會と來ては堪らない。馬鹿な演說が澤山あるだらう。とんちんかんな事だらけで、可笑しくもないのに笑つたり何かしてゐるのだ。勿論そんな事だといふ事は初めから分つてゐたのさ。だが己は少し氣が浮々して來たもんだから、むちやくちやに饒舌つてゐたのだ。さうすると思ひかけない事に出合つたよ。

モデル。その思ひかけないと仰やるのは。

畫家。うむ。己の話の分つて呉れる女がゐたのだ。心から分るのだ。言筌を離れて分つてくれるのだ。己の言ふ意味が分るかい。己とその女とは初めて顏を見合つたのだ。人に面倒な紹介をして貰つたわけぢやあない。あらゆる因襲を離れて出し拔けに出合つたのだ。人間と人間とが覿面に出合つたのだ。どんな工合だか、お前には中々分るまい。食卓を離れてから、その女と隅の方へ引込んで、己は己の事を話す。女は女の事を話したのだ。何んでも、大體はお互に知り合つてゐて、瑣末な事を追加して話すといふやうな工合さ。何んでも、萬事いはなくつても先へ知れてゐるといふ工合なのだ。妙ぢやあないか。

モデル。（無理に微笑む。）それは隨分ね。

畫家。え。

モデル。隨分珍らしい事といふものでございませうね。

畫家。大抵一人の人間に打つからうといふには、色々な準備が、支度が入るものなのだ。初めの內は誤解もするし、怒るやうな事もあるし、場合に依つては誰か死ななくては目ざす人に近寄られないといふやうな事さへある。人の心に取入るには、强盜に這入るやうな事を爲なくてはならない。人の防禦しない折を狙つてゐて、奇襲をやらなくちやあならない事もある。どうかしたわけで、先方が門の戸を開けてゐるのを見計らつて、そこへ急に、亂暴に闖入しなくちやあならない。それにきのふなんぞの工合といつたらないのだ。門戸は十字に開いてある。そこへ己が飛込んだのだ。

そして。（娘の方を見る。）何か言つたのかい。

モデル。いゝえ。そんな事がございましたら、どんなにか嬉しい事でせうね。

畫家。そりやあ嬉しいさ。平然として人の腹の中に這入つて行くのだ。風雨を冒して、冒險的に近付くのではない。平和のまゝで這入つて行くのだ。自然にさうなくてはならないやうな工合に、青天白日に這入つて行つたのだ。

モデル。へえ。

畫家。分るかい。

モデル。（無理に微笑む。）少しはお察し申す事が出來ますの。

畫家。（微笑む。さて、うつとりとして。）さうだらう。好くは分るまいな。己が無暗に饒舌るから。併し己はきのふの工合を、自分の口でいつて見て、その詞を自分の耳に聞いて見たいのだ。お前がそこで聽いてゐてくれなくても、己は一人で饒舌りたい位なものだ。

モデル。（悲し氣に。）それではわたしが承つてゐましても、お邪魔にだけは成りませんのね。

畫家。なになに。（何か深く思ふらしく。）そんな風に平和のまゝで相手の人間に近付くと、どの位の利益があるか分るかい。さういふ時でなくつては、相手の人間の眞實の處は分らないのだ。

モデル。眞實の處ですつて。

畫家。さうさ。その人を買被つたり、見そこなつたりしないて。

モデル。（何か物を思ふらしく。）さうでございませうとも。（詞急に。）そんな時にお感じになつた事は間違ひこは無いと思つて入らつしやいますの。

畫家。間違ひこはないとも。きのふ出し抜けに話合つたのを、お互に自然のやうに思ふのと同じ事で、これから先一しよに生活して行く事をもお互に自然のやうに思ふに違ない。

モデル。（驚ろき自ら抑へて、詞急に。）そして、そのお嬢さんもあなたにすつかり身の上を打明けてお話しなさいましたの。

畫家。うむ。跡になつてはすつかり話したのだ。初めに己が洗ひ浚ひ饒舌つてしまつて　それから向うが話し出した。まるでずつと昔から知り合つてゐる中のやうに、極親密に話したのだ。子供の時の事も聞いたし、双親の事も聞いた。双親とも亡くなつて、一人ぼつちなのださうだ。あんな風に成つたのも、そのせいかも知れなかつたよ。

モデル。あんな風と仰やるのは。

畫家。不思議に打明けるやうになつたのが。

モデル。そのお嬢さんが一人ぼつちで入らつしやつたからだと仰やるのね。

畫家。うむ。丁度己のやうに一人ぼつちでゐたのだから。

モデル。あなたのやうにですつて。

畫家。（微笑む。）さうさ。己のやうに一人ぼつちなんだ。ふん。お前のやうにといつても好いかも知れない。お前だつて一體一人ぼつちなのだらう。

モデル。（無理に笑ふ。）わたしですか。わたしは隨分お友達がございますわ。

畫家。（娘の笑ふのに、殆ど氣付かざる如く。）ほんにあんな事がある

といふ事をきのふより前に己にいふものがあつたら、己だつて信じはしなかつたんだらうよ。（立ち上る。）

モデル。（又悲し氣になる。）さうでございますね。きのふまでは夢にも心付かない事があるものでございますね。

畫家。さうさ。人生はさうしたものだ。そこが人生の美しい處なのだよ。思ひがけない處がなあ。（間。）

モデル。わたしのお父さんがよくさう云ひましたつけ。思ひかけずに死ぬるのが一番美しい死ですつて。

畫家。（娘の顏を見る。）何んだつてそんな事を思ひ出したのだ。

モデル。つひ思ひ出しましたの。

畫家。お前にはそんな暗黑面でない、光明面の思ひ出はないのかい。

モデル。（何か言はんとして止め、詞急に。）併しわたしはもう。

畫家。もう行くのかい。又お出でよ。

モデル。（二三歩行きかゝりて戻る。）もう當分伺ひませんわ。

畫家。なぜ。

モデル。でも當分御一しよの、（間。）あなたのお爲事は駄目でせう。

畫家。（娘の方を見ずに窓の處に行く。）うむ。そりやあお前の言ふ通りかも知れない。（突然活潑になりて二三歩前の方へ出て、獨言。）そのくせゆうべヘレエネと話してゐるうちに、直にでもかき始められるやうに思つたのだが。（娘に。）己はそのお嬢さんに、己の繪の事をみんな話したのだ。

モデル。それでは去年の十一月におかきになつた畫の事もお話しなさいましたの。

畫家。それも話した。併しおもにこれからかく分の事を話したのだ。今までかいた繪の事は向うにみんな知れてゐるんだから。（娘不審氣に畫家の顏を見る。）さういつては分るまいが、己の既往の事が向うにみんな分つたのだから、己のかいた繪も、それがどんな繪か、どんな感情の繪かといふ事は向うに知れてゐるのだ。熱心に、大急ぎで、切れ切れに話すうちに、何もかも不思議に向うに分つたのだ。併しさつきも言ふ通り、主に話したのは未來にかく繪の事だ。それは是非話さなくてはならなかつたからな。

モデル。（小聲に。）よくまあそんなに何もかも一度にお話しなさる事が出來ましたのね。

畫家。さうさ。そのうちにこんな繪があつたよ。移住者といふ題なのだ。廣い、平な畠がある。收穫の後だ。何んだか斯う利用してしまつた土地といふやうな風で、寂し氣に、貧乏らしく見えてゐる。そこを人が立ち去る處なのだ。一群の人がぴつたり迫ぎ合つて入日の方に向いて行くのが、暗い形に見えるのだ。多くは自分の輪廓に壓されてゐるやうに背中を曲げてゐる。その事を話すとお嬢さんが云つたつけ、地平線に行つて山にでもなつてしまひさうな風に歩いて行くのでせうねと云つたつけ。實によく呑込めたものだ。己の思つてゐる人物は地平線の方に行つて山になつてしまひさうな形に相違ない。（間。）　それから、も一つこんな繪の事を話したつけ。畫題は基督といふのだ。己がその事を言ひ出すと、半分いはせずにお嬢さんがさういつたつけ。人物ではないでせう。風景でせう。期待が當來を知ら

せるのでせうと、さういつたつけ。おい。マッシャ。かけるやうな氣分に早くなつて見たいなあ。（兩手を擴げて未來を揺き抱く如き振をなす。）

モデル。さうですね。實行が一番難しいのですね。

畫家。さうだて。やる時は暴力でやるのだ。その日の朝だつて、あたりまへの朝と變つた事はないのだ。詩人なら机に向く。畫かきなら畫架に向く。そして出し拔けに未曾有の事を決行するのだ。一體は沈默の内でなくては思量せられない筈の事を、言語に現はし色彩に現はすのだ。言語で言へば、丁度熱心に、大聲で、息をはづませて、人が千人も前に立つてゐて、その詞を飢えたものが麪包を求めるやうに求めてゐる積で、語り出すやうな工合に。

モデル。（殆ど聞えざるほどの小聲にて。）千人の人が待つてゐるより、もつと切に待つてゐるものがございますの。

畫家。でもお前なんぞにはよくは分るまい。（疲れたる如く、手を額に翳す。）

モデル。（徐に。）それはどうせよくは分りませんわ。

畫家。もう行くかい。（繪具入の箱等に歩み寄り、紙卷を一本取りて火を付く。）そんなら暫く合はないかも知れないよ。ヘレエネがもう來る筈だ。お前に用がある時が來れば、さういつてやるよ。

モデル。わたしに御用がおありなさる時と仰やるのですね。

畫家。うむ。葉書をやるよ。（握手せんとして手を差伸ぶ。握手。）冷たい手だな。（初めて氣の付きたる如く顏を見る。）今日は大變に血色が惡いよ。ゆうべ寐なかつたのかい。

モデル。えゝ。少ししきやあ寐ませんでしたの。

畫家。（握りたる手を放し、上の空にて。）相變らず踊やなんぞで夜を更かすのかい。

モデル。（悲し氣に。）えゝ。年が年中ですわ。

畫家。（笑ふ。）ぶん。體を大なしにするなよ。左樣なら。

モデル。左樣なら。（急ぎ足に退場。）

畫家。（爲事机の前に立ち、紙卷を喫みながら、部屋の内を見廻す。娘が戸を開くる時、詞急に。）おう。掃除をしてくれたのに、禮も直に言はなかつたつけ。それから何んだつけ。何時頃にこの前を通るかい。

モデル。こゝを通るのですか。お午にはおつ母さんの處へ歸るのですから、もう二時間もすれば通りますわ。

畫家。二時間と。丁度好い。その時少し花を買つて來てくれないか。どうだ。さうしてくれるか。

モデル。（たゆたひつゝ。）何んの花でございますの。

畫家。さつき話したお嬢さんに上げるのだ。己の處には何んにもありやしない。自分で買ひに行くと、留守に來られるかも知れない。こゝの婆さんを賴んで使にやると、お極りでニホヒアラセイトウを買つて來やがる。花といへば屹とあれを買ふのだ。まるで固定妄想だ。何か氣の利いた花を見立てゝ買つて來てくれないか。どうだい。

モデル。（小聲に。）薔薇ではどうでせう。

畫家。何んでも好い。お前ならとんちんかんな事はしないから。お嬢さんは丁度お前位のブロンドな髮をしてゐるのだ。その積で見立てゝくれい。

モデル。それでは髮に挿す花ですね。

畫家。（じれつた氣に。）髮に挿されゝば、挿させても好いのさ。つまり花が上げたいのだ。（間。娘行かんとす。）それからなあ。序に少し果物を取つて來てくれい。春ばかりでは物足りない。夏もゐるからなあ。柑子が好い。よく眞赤に熟したのを買つて來てくれい。南國の甘い夏を包んでゐるやうな柑子が好い。賴むよ。二時間ほどすれば來るんだな。

モデル。えゝ、えゝ。それでは花と柑子ですね。（戸を開く。）

畫家。嬢さんを見せてやるから。

モデル。（稍敵對の語氣にて。）わたしがお目にかゝらなくちやあならないのでせうか。

畫家。なぜ。己が見せたいのだから、好いぢやあないか。

モデル。えゝ、えゝ。それでは花と柑子とを持つて參りますよ。

畫家。うむ。左樣なら。（娘退場。畫家はゆるやかに部屋の内をあちこち歩るきゐる。折々或繪の前に立ち留まりて、何を思ふともなしに繪を見る事あり。又暫く歩きて、突然爲事机の傍に寄り、机の上の物を上を下へといぢり廻し、終りに壁に掛けたる袋の中よりブラシを見出して手に取り、上着の塵を拂ふ。戸を叩く音す。畫家は忙はしく一はけ二はけ拂ひて、ブラシを投げ捨て、大股に、二三歩にて戸の處に行き、呼ぶ。）お這入りなさい。

令孃。（上品なる散歩服。極めて氣高き態度。ブロンドなる髮。令孃には少し老けたる年配。○畫家は暫く詞無く、令孃の顏を凝視す。）もうお見忘れなさいましたの。

畫家。（急に物狂ほしく。）ヘレエネさん。お待ち申してゐました。

令孃。（畫家が握手せんとして手を差伸ぶるを見て、徐に右だけの手袋を脫ぎ、指輪を嵌めたる、細長き、優しき手を出す。握手。）わたくしには、あなたといふ事が直に分りましたの。

畫家。でもお分りにならない筈はないではございませんか。

令孃。併し畫間お目にかゝるのは初めてゞございますからね。

畫家。（少し我に返りて。）ほんにさうですね。實は少し面喰つたのです。どういふわけだか、あなたは屹とエエルを被つて入らつしやる筈のやうに思つてゐたもんですから。

令孃。さうでございますか。こんな風な訪問を致す時はエエルを被るものでございましたかねえ。

畫家。そんな事をいつちやあいけません。只何がなしにそんな氣がしてゐたのです。

令孃。御心配なさらなくつても、ようございますよ。わたくしの這入つて參つたのは、誰も見てはゐませんでした。

畫家。（間の惡氣に。）わたしはそんな事は何んとも思つてはをりません。さあ。どうぞ。（部屋の中へ入れと勸むる振を爲す。）

令孃。（笑ひつゝ。）も少しで餘所餘所しくお嬢樣とでも仰やるさうな處でしたね。さうでせう。（歩み近付く。）

畫家。いや。どうも。

令孃。お嬢樣、どうぞこちらへお通り遊ばしませとでも仰やりさうでしたのね。（手近なる椅子に腰を掛く。）

畫家。（眞面目に。）ほんにそんな事を言ひかねない處でした。

令孃。（滑稽に。）やれやれ。もうお互の中もそこまでになりましたかね。（二人とも笑ふ。）

畫家。莨を上るでせう。（紙卷の箱を出す。）

令孃。（紙卷を一つ取りつゝ。）今日ばかりの事ですから、やつぱ

りヘレエネと、名を仰やつて下さいまし。

畫家。（驚きたる顏にて相手を見る。）今日ばかりとはどういふのです。あしたからはどうなるのです。

令嬢。あしたからてございますか。（間）火を下さいまし。どうぞ。

畫家。（手を動かさずに。）それでもどういふわけで。

令嬢。おやおや。自分で莨も付けなくちやあならないのてございますのね。

畫家。（慌てゝマッチを付けて出す。）どうぞ勘忍して下さい。（忽然何物かを認め得たる如く。）ヘレエネと呼べといふのですね。事によつたらあなたは本當はヘレエネとは仰やらないのではないのてせうか。

令嬢。（莨を試るやうに喫む。）いゝえ。全くヘレエネといふのてございますよ。

畫家。さうですかねえ。どうも。

令嬢。あなたは莨を上りませんの。それにまあ兎に角お掛けなさつてはどうてせう。

畫家。（急に腰を掛く。）さあ掛けました。

令嬢。（微笑む。）それでお樂ですか。

畫家。（笑ふ。）樂ですとも。

令嬢。（徐に部屋の内を見廻す。）ようございます事ね。

畫家。何がです。

令嬢。この部屋が好いと申すのでございます。かういふ處でどんな風にして繪をかいて入らつしやるといふのが、想像が出來ますわ。（莨を捨て、兩手を差伸べ、溫に。）本當にわたくしは、このお部屋を拜見いたすのを、昨晩から樂に致して參りましたのでございますよ。あなたのお身の廻りにあるこんなものを殘らず。

畫家。（踊り上る。）本當ですか。

令嬢。（徐に。）えゝ。舞臺を拜見しなくてはと思ひましたのてございます。

畫家。舞臺とは。

令嬢。あなたとわたくしとの生涯を送つた舞臺の跡を拜見いたしたいと存じまして。

畫家。生涯ですと。

令嬢。きのふ一日に縮めた生涯と申すのてございます。

畫家。まあ、何んといふ妙なお詞てせう。

令嬢。（兩手にて取りゐたる畫家の手を放し、椅子の背に寄りかゝる。）わたくしの申す詞は明瞭てないかも知れませんが、それは御勘辨遊ばさなくてはいけません。言語といふものはかういふ風な事を言ひ現はすやうに出來てゐないものてございますから。

畫家。どうしたといふのです。

令嬢。あなたは今日お互に顏を合せてどう致すと思召して入らつしやいましたの。

畫家。どうすると言つたつて知れてゐるてはありませんか。あなただつて同じ事てせう。

令嬢。わたくしには分つてゐますの。只伺ひたいのは、あなたがどう思つて入らつしやつたかといふ事てございますの。

畫家。わたしは只今日から二人の生涯が始まると豫期してゐたばかりです。

令嬢。その始まる生涯と仰やるのは。

畫家。あなたとわたくしとの、これから渡つて行く生涯です。

令嬢。おや。それではあなたはもう一遍二人の生涯を生きて見ようと仰やいますのてございますか。

畫家。成程。さういへば、きのふ一つの生涯を送つたと見做せば見做されない事はないてせう。もしきのふ一つの生涯が濟んだなら、その濟んだ生涯を續けて、押し廣めて行かなくてはならないてせう。それが本當に生きるといふものてせう。

令嬢。まあ。もう一度生きられるものだと思召して入らつしやるの。

畫家。（一歩退く。）ふん。どう思つてお出なのてすか。

令嬢。てもこ二人が生涯にする程の事は、何もかもきのふ致してしまつたのではございますまいか。（畫家は相手を凝視しゐる。令嬢は相手の目の内に現はれたる怪怖、恐怖を排し去らんとする如く、拒む手付を爲して。）御覽なさいまし。只今のあなたの恐しくお思ひ遊ばす、そのお心持が、丁度昨晩のわたくしの心持と同じなのてございますよ。丁度只今のあなたのやうに、昨晩はわたくしが恐しく存じましたの。

畫家。（張のなき聲にて、やうやう。）恐しく。

令嬢。えゝ。恐しうございました。あなたが少しもお立ち留りなさらずに、わたくしを引き摩つて、空を翔けるやうな生活の眞中へ駈込んでおしまひなさつたのてすもの。過去も、現在も、未來も一しよになつて分らないやうな生活の中へ、燃え上つてゐる大きな焰の中の薪のやうに、わたくしにあなたが用捨もなく、未來に殘して置かねばならない筈の生活までを、只一刹那の中に込めて、消費しておしまひなさるのを、どんなにか惜く思ひまして、あなたのお手に縋つてお留め申したいやうに存じましたが、致し方がございませんでした。わたくしの心持では、かう申したいのてございました。まあお待ち下さいまし。こゝて、この場てさうまて遊ばさない方がようございませう。そんなに一息に何もかも過ぎ去らせておしまひなさいますな。まだこれから生きなければならないのてございますからと、さう申してお留め申したかつたのてございます。それにあなたはどうしてもお聞き遊ばさなかつたてはございませんか。そして無理にわたくしを引き摩つて、先へ先へと駈けて入らつしやいましたてせう。何もかも殘さずに、總てを得なくてはならないといふ風に。（詞を緩め、悲し氣に。）それだもんてございますから、とう〳〵わたくしはあなたに總てを捧げてしまひましたの。

畫家。（一瞬間令嬢を凝視し、突然その膝に身を投げかけ、兩手を肩に掛け、抱き付きて、叫ぶやうに。）あゝ。ヘレエネさん。

令嬢。（兩手の間に畫家の頭を挾みて抑へ、目と目を見合せ、一瞬間極めて眞面目になりゐて、さて詞ゆるく、極めて悲し氣に。）これてとう〳〵お別も、致しましたのね。（間。）

畫家。（急然、激しく愉快を感じたる如く、一層嚴しく抱き付きて。）これ切りだなんて、ひどいてはありませんか。あんな大勢の人の

中で話をした切て、お互の生涯が濟んだと見做されるものですか。まあ。考へて見て下さいよ。

令嬢。（優しく。）それでも濟んだものは濟んだのでございますから、どう致す事も出來ませんわ。あんな席て、人の中ではございましたけれど、あなたがさう遊ばすものでございますから、わたくしの心の底まで明放して、わたくしのあなたに捧げられるだけのものは捧げてしまつたのでございますの。（畫家徐に手を放す。）あなたの感情の猛烈な處も、お優しい處も、みんなわたくしには分つてゐますの。それですから、どんな事を遊ばしたつて、意外だなんとは存じませんわ。只一刹那の間ではございましたけれど、あなたは只手と手とが障つたばかりて、わたくしを裸體にして抱き遊ばしたのでございますよ。

畫家。（煩悶して。）どうぞ勘忍して下さい。

令嬢。（畫家の方へ俯向く。）わたくしはそれを後悔なんか致しませんの。わたくしの爲にも大きい幸福てございましたわ。本當に嬉しいと存じましたわ。

畫家。（顫ひつゝ仰ぎ見て、頼むやうに。）ヘレエネさん。（令嬢の膝の上に俯伏す。）

令嬢。（畫家の髪を撫づ。）本當にわたくしは何もかもあなたに縱してしまひましたの。只二人の間に子供を持つ事が出來ない計りでございますわ。（畫家歎息す。）あなたがさうしておしまひなさつたのでございますから、爲樣がございませんわ。

畫家。（小聲にて。）それでも。

令嬢。　え、。

畫家。　どうしても今一度、現實の世界で。

令嬢。　いゝえ。それは致さない方が宜しうございますの。無理に致しましても、その製作は失敗に終りますわ。

畫家。　あゝ。

令嬢。　あなたにはそんなお心持は致しませんですか。わたくし共二人は、遠い遠い無人島て、何年も何年も暮しましたのでございますわ。

畫家。（頭を擡ぐ。）はあ。

令嬢。　そして愛の限りを味はつて幾度も幾度も接吻いたしましたの。

畫家。　それがもう出來ないんですか。

令嬢。（微笑む。）えゝ。出來ませんわ。

畫家。　なぜでせう。

令嬢。　もう無人島から歸つて來たのでございますもの。歸つて來て見れば、只の世界で、物が重りを持つてゐたり、日がさせば影を落したり致しますのでございますからね。そして出來事と出來事との間には、遠ひ道のやうに、年月といふものがあるのでございますからね。こんな世界に歸つて來て見れば、あなたとわたくしとはこれでお別に致さなくてはなりませんのでございます。

畫家。（煩悶して。）そんならどうでも別れるといふのですか。

令嬢。　お別だけがこの世界へ歸つてからのものに殘つてゐたのでございますわ。別なんといふものは、時間に屬するものですから、あの島ではそんなものはなかつたのでございます。（間。）

畫家。　どうしてもこの世界で。

令嬢。　いゝえ。理に致しましても、その製作は失敗に終りますの。無理に致しましても、その製作は失敗に終りますわ。

畫家。　あゝ。

令嬢。　あなたにはそんなお心持は致しませんですか。わたくし共二人は、遠い遠い無人島て、何年も何年も暮しましたのでございますわ。

畫家。（頭を擡ぐ。）はあ。

令嬢。　そして愛の限りを味はつて幾度も幾度も接吻いたしましたの。

畫家。　それがもう出來ないんですか。

令嬢。（微笑む。）えゝ。出來ませんわ。

畫家。　なぜでせう。

令嬢。　もう無人島から歸つて來たのでございますもの。歸つて來て見れば、只の世界で、物が重りを持つてゐたり、日がさせば影を落したり致しますのでございますからね。そして出來事と出來事との間には、遠ひ道のやうに、年月といふものがあるのでございますからね。こんな世界に歸つて來て見れば、あなたとわたくしとはこれでお別に致さなくてはなりませんのでございます。

畫家。（煩悶して。）そんならどうでも別れるといふのですか。

令嬢。　お別だけがこの世界へ歸つてからのものに殘つてゐたのでございますわ。別なんといふものは、時間に屬するものですから、あの島ではそんなものはなかつたのでございます。（間。）

畫家。（立ち上る。）わたくしの方では、きのふの事は幕明の音樂で、忙しい調子の中へ、あらゆるモチイヴを叩き込んだものに過ぎないので、これからが本當の曲になると云ひたいのですが、あなたには、何んと云つてもさう考へて下さる事が出來ないのですね。

令嬢。　これから本當のオペラにしようと仰やるのてございますか。

畫家。（頷く。）　えゝ。これから本當のアクションにしようといふのです。

令嬢。（微笑む。）なぜわたくしがオペラと申しましたのを、わざわざアクションといふ詞にお換遊ばしたの。もしこの跡を續けましたら、それこそオペラてございますわ。本當のお芝居てございますわ。わたくしはそれが怖いと存じたのてございます。

畫家。　まあ。そんな事までいつの間に考へてゐたのですか。

令嬢。　ゆうべ夜通し考へてゐましたの。（間。）

畫家。（あちこち歩き始む。）何もかもノンセンスだ。（間。又歩きつゝ。）不思議だ。

令嬢。　えゝ。不思議でございますとも。この不思議の中に立つて、踏み迷はずに、しつかりしてゐなくつてはならないのでございますわ。（畫家立ち留る。）えゝ。大抵の人なら迷つてしまふかも知れませんわ。さういたして、目のくるめくやうな樂の急調を、常の日に調べようと致すのてございませう。併し舞の伴奏の樂は、只歩く時の足取には合ふ筈がございませんの。不調和な、馬鹿らしいものになり勝てございますわ。お互にそんな事は致したくないのてございますからね。お互に兎に角、翼のある情緒を持つてゐる人間なのでございますからね。

畫家。　そこまで深く考へて見たのですか。

令嬢。　えゝ、えゝ。そんな事は、あなたの方では考へて下さらないといふ事が、わたくしには分つてゐましたの。年上でございますからね。（畫家科あり。令嬢徐に。）えゝ。年上でございますよ。それにきのふとは違ひますの。（調子を變ふ。）併し兎に角、お互に普通の人間てだけは無い事が分りましたのでございますね。

畫家。　普通でないとは。

令嬢。　新人てございますわ。何んに致せ、あの大勢のゐる宴會の中で、隱れ簑、隱れ笠をても持つてゐるやうに致す事の出來た二人でございますから。

畫家。　おう。さういへばあなたはゆうべも隱れ笠といふ事を云ひましたつけね。

令嬢。　えゝ。申しましたわ。そんな風になられるまで、因襲の外に脫出してゐるのでございますからね。人のゐたのなんぞは、ちつとも邪魔には成りませんでしたわ。今日あたりは吃とみんなで評判を致してゐるのでございませう。ミルネル畫伯はあの令嬢に大相取り入るやうだつたなんぞと云つてゐるのでございませうよ。あしたあたりをばの處へ參りますと、をばが吃と、ミルネルさんが訪問にお出なさりさうなものだなんといふのてせう。さう致してあなたがお出なさりはなさるまいかと二週間位は心待に待つのでございますわ。お互にそんな事は致したくないのてございますからね。

畫家。　そこまで深く考へて見たのですか。

令嬢。　えゝ、えゝ。そんな事は、あなたの方では考へて下さらないといふ事が、わたくしには分つてゐましたの。年上でございますからね。（畫家科あり。令嬢徐に。）えゝ。年上でございますよ。それにきのふとは違ひますの。（調子を變ふ。）併し兎に角、お互に普通の人間てだけは無い事が分りましたのでございますね。

畫家。　普通でないとは。

令嬢。　新人てございますわ。何んに致せ、あの大勢のゐる宴會の中で、隱れ簑、隱れ笠をても持つてゐるやうに致す事の出來た二人でございますから。

畫家。　おう。さういへばあなたはゆうべも隱れ笠といふ事を云ひましたつけね。

令嬢。　えゝ。申しましたわ。そんな風になられるまで、因襲の外に脫出してゐるのでございますからね。人のゐたのなんぞは、ちつとも邪魔には成りませんでしたわ。今日あたりは吃とみんなで評判を致してゐるのでございませう。ミルネル畫伯はあの令嬢に大相取り入るやうだつたなんぞと云つてゐるのでございませうよ。あしたあたりをばの處へ參りますと、をばが吃と、ミルネルさんが訪問にお出なさりさうなものだなんといふのてせう。さう致してあなたがお出なさりはなさるまいかと二週間位は心待に待つのでご

ざいませうよ。（笑ふ。）わたくし共が二十年も御一しょに暮した事は、をばさんは知らないのですからね。人はたつた二時間だと思つてゐたのてございますから。

畫家。なぜ二十年といふのですか。

令孃。（快活に。）えゝ。二十年位で若死を致したものと思つて見ましたの。（畫家頭を振る。）幸福の眞最中に死んだのてございますわ。美しい死てございませう。こんな閲歴は外の人には出來ますまいてはございませんか。

畫家。（嘲ける帶びて。）あんな風になら、一人て幾生涯ても生きて見られようぢやありませんか。

令孃。（眞面目に。）えゝ。それが出來ましたなら、現代人の藝術の能事畢れりてはございますまいか。

畫家。藝術てすと。

令孃。藝術と申しましたのは惡かつたかも知れません。そんなら現代人の要求とても申しませうか。一つ一つの閲歴にそれ相當の調子を與へる事が出來まして。それが一つ一つの全きものになりましたなら、一つ一つの生涯になりましたなら、その人は千萬の生涯を閲する事が出來ませうてはございませんか。

畫家。そして千萬たび死ぬるのてすか。

令孃。えゝ。千萬たびの死を凌ぐのてございます。そんな風にはお感じなさいませんか。

畫家。どうしてそんな事をいふのてすか。

令孃。わたくしがどうしてさう思ふのだか、お分りになりませんの。（立ち上る。）あなたは畫家て入らつしやいます。一日繪をおかきなさいますてせう。それが只の一日てございますか。

畫家。いゝえ。勿論それは只の一日てはありません。多くの日をその一つの圖に入れるのてす。出來る事ならわたくしの覺えてゐるだけの日をみんな入れるのてす。

令孃。それ御覽なさいまし。秘密を道破しておしまいなさいましたわ。

畫家。なぜ。

令孃。あなたはきのふ宴會に入らつしやる時、繪をかきかけて置いて入らつしやつたのてはございませんか。

畫家。かいてはゐなかつたのてす。併し。

令孃。てもかうと思つて入らつしやつたのてございませう。

畫家。かけるかも知れないと位は思つてゐたのてすよ。

令孃。（喜ばし氣に。）そこておかきなさつたのてございますわ。あなたは作品に加へる尺度をわたくしに加て、わたくしとあなたとの間を、一つの作品にしておしまひなさつたのてございます。而も不朽の作品に。

畫家。（悲し氣に。）あなたが不朽だといつたつて、その作品は今日跡もなく亡びてゐるのてす。

令孃。あなたはさう仰やるけれど、あなたのおかきになつた繪だつて、いつ誰が見てもその繪と見えるやうに、いつもそこにあるといふわけてはございますまい。そんな事はないのてございませう。あなたの繪があるといふのは、あなたの繪の生命のある處へ這入つて行く事の出來る人の爲にあるといふわけてございませう。その意味からいへば、ゆうべお作りなさつた作品も、不朽に存在してゐるといふものてはございますまいか。

畫家。（眞面目に相手を見る。間。）成程。あなたはそんな風に考へたのてすか。

令孃。（頷く。）えゝ。さう考へましてわたくし丈は、生活の爲に必要な或教を得たのてございますの。

畫家。さう云ふと教といふものが、必要なやうてすが、實は世の中には、何んといつたら好いてせうか、手本無しに生活して見ようといふ人も隨分あるのてはないてせうか。因襲なんぞから得來つた智識を自分に應用せずに、初めて人間として生れて來たものゝやうに振舞ふのてすね。もしさういふ人があつたなら、その人は一つ一つの出來事に、それに協つた尺度を持つて行つて當てるわけてはないてせうか。無意識にそれに協つた尺度を當てるのてすね。

令孃。それは一つか二つか、三つ位までの出來事には無意識に當た尺度が丁度好いといふ事もあるのてございませう。併し幾ら手本無しに生活すると申しても、さういふ人てございましても、どうせ生々しいのてございませうから、何事かに出合まして、五つや六つの調子を覺えましても、それから先は分りませんから、その五つか六つの調子をあらゆるものに當て嵌める事になつてしまふのてございませう。人生に應ずるには幾千の調子が入るか知れないのてございます。そこて一つ間違を致しますと、さういふ人は慌てまして、屹とこれまてに覺えてゐる因襲の内の、一番現在の場合に當嵌りさうなのを持つて來て、それを應用しようと致すのてございませう。（間。）あなたのお身の上て申して見ますれば、あなたはわたくしと結婚遊ばしたのてございませう。

畫家。（正直に驚きたる樣子。）いや。結婚などをする積てはなかつたのてす。

令孃。結婚はなさらなかつたのてございますの。そんならどう遊ばす筈てございましたの。

畫家。そりやあ。（間。）さうてすね。そんな事をいつたつて駄目だし。

令孃。いゝえ。なんても宜しうございますから言つて御覽なさいましよ。

畫家。只一しよになつてゐたのだらうといふのてす。

令孃。こゝにてございますか。

畫家。それはこゝても好いし、どこか外へ行つたら、猶好いてせう。あなたのをばさんが喧しさうてすから。

令孃。まあ。結婚も致さずに、只何がなしに御一しよにゐるのてございますね。

畫家。さうてす。何がなしにてす。そら。外の繪かきもやつてゐるてせう。（令孃笑ふ。畫家默りて相手の顔を、何故笑ふかと問ひたげに見る。令孃愈笑ふ。）何がそんなに可笑しいのてすか。

令孃。それても、そんな風な生活は、もうとつくに因襲になつてしまつてゐるぢやあございませんか。

畫家。それでも。因襲といつたつて。

令嬢。　えゝ、えゝ。同じ因襲でも、一般の社會での因襲でなくつて、或狹い仲間内での因襲でございませう。併し因襲は因襲でございますから、狹い仲間内の因襲だからと申しましても、特別に好い筈はないではございますまいか。そんな風に致しましたら、わたくしはやつぱり段々に扮裝なんぞを構はなくなりまして、化粧も致さないやうになりますのでございませう。（畵家呆れて相手の顏を見なり、さてつひに己れも笑ひ出す。令嬢又笑ふ。）それ御覽なさいましな。（間。）まあ、お互に斯ういたして笑つてゐられます間に、お暇乞をいたしませう。

畵家。（驚く。）行くのですか。

令嬢。　えゝ。只、今一つ申して置きたい事がございます。どうぞこんな事になりましたのを、おくやみなさらないで下さいまし。もしわたくしの事を思ひ出して下さいますなら、どうぞ昨晩のやうな調子にしてお考へ遊ばして下さいまし。美しい調子に、メロディのある調子にしてお思ひ出し遊ばして下さいまし。それだけは是非お願ひ申して置かなくてはなりません。わたくしの致した事を、もし不斷の尺度で、日常生活の尺度で量つて下さいましたら、それはわたくしの爲にひどい寃罪になるのでございますから。

畵家。（令嬢の手を握り、目を見合せ、默りゐる。さて。）どうもかうなれば爲樣がありません。日常生活の尺度で量つても好いやうな幸福はないものでせうか。（手を放す。）

令嬢。　そんな幸福を求めようと仰やるのでございますか。

畵家。（急に。）えゝ。

令嬢。　さう仰やれば、わたくしがこのお部屋へ參りまして、心付いた事がございますから、御遠慮なくそれを申して見ませうか。

畵家。　何んでせう。あなたがこの部屋へ這入つて、直に氣の付いた事があるといふのですね。

令嬢。　えゝ。あなたの仰やるやうな幸福が。

畵家。　そんな幸福がどこかにあるといふのですか。

令嬢。　えゝ。何んだかこのお部屋の空氣の中に、さういふ幸福の影が漂つてゐるやうでございますね。

畵家。　ふん。

令嬢。　どうもわたくしには、そんな風に感じられますの。

畵家。　今でもですか。

令嬢。（徐に。）なんでももう餘程前からの事でございませう。

畵家。　それがあなたには分らないでゐるのでございませう。何んでもあなたの生活にぴつたり寄添つてゐるものがございますやうに思はれますの。その隱れた幸福と、あなたの生活とは、息が合つてゐますやうに、一つ呼吸をしてゐますやうに思はれますの。思ひ違ひかも知れません。こんなのが女の直覺とかいふものでございませう。併し考へて御覽なさいまし。お思ひ當り遊ばす事がありは致しませんか。（畵家首を垂る。令嬢は徐に畵家の傍より離れ去る。）ね。何んでもいつもあなたのお傍にゐて、あなたのお目に留らないやうな人がゐるのではございませんか。その人は餘りあなたの生活に密接な關係を持つてゐますので、あなたはそれを家常の茶飯のやうに思召てお氣をお留め遊ばさないのではご

ざいませんか。よくお考へなすつて御覽なさいまし。ね。

（徐に戸の口に歩み寄り、徐に戸を開き、退場。）

畵家。（物思に沈みて凝立すること暫くにして、忽然夢の覺めたるが如き氣色をなし、四邊を見廻す。やうやうにして我に返る。）へレエネさん。（畵家は暫く耳を聳てゐる。四邊はひつそりとして物音無し。畵家は再び戸を鎖し、跡に戻り、物を案ずる樣にて部屋の内をあちこち歩き、何かそこらの物を手に取りては置き、又外の物を手に取りては置き、紙卷を一本取りて火を付け、一吸吸ひ、忽ちそれを投げ捨て、右手の爲事机に駈け寄り、慌たゞしく物をかき始む。暫くして何事をか口の内にてつぶやき、癇癪を起したる樣子にて、その紙を引裂く。さて外の紙を取りてかき始め、暫くしてかき止め、又その紙を引裂く。さて暫く空を睨みゐて、忽ち激しき運動にて兩手を顏に覆ひ、兩肱を机に突き、死人の如く動かずに坐りゐる。○暫くありて、戸口よりモデル娘入り來る。徐にためらひつゝ部屋の内に進み、始終物を怖るゝ如く四邊を見廻す。娘は片手に伊太利亞種の赤き翁草の花の大束を持ち、片手に柑子を盛りたる籠を持ちゐる。さて畵家の、己れの方に背中を向けて、先の姿勢を取りをるを見付け、驚き、徐に。）

モデル。　今日は。（ひつそりとして物音無し。娘は徐に煖爐に歩み寄り、その上なる素燒の瓶を取りて繪具入の箱笥の上に据ゑ、それに翁草の花を挿す。その間に畵家は少し身を動かし、娘を見る。さて立ち上らんとして又腰を落し、女のする事を見てゐる。娘は忽ち畵家の己れを見るに心付き、詞急に。）お休なすつたの。（間。）花を持つて參りましたの。そしてあの柑子も。

畵家。（詞急に。）うむ。好い好い。（立ち上り、歩み寄る。）翁草を買つて來たね。お前はその花が好きかい。

モデル。（驚く。）これではいけなかつたのですか。

畵家。　好いとも。（花を二三本取りて、娘の髪に當てがひ見る。）お前のブロンドな髪に映りが好いぜ。

モデル。（さつぱりと。）そのお嬢さんがわたしの髪とおんなじならようございますが。

畵家。（驚きたる顏にて相手を見、さて。）あゝ、その事かい。（間。）そんな事はもう忘れてゐた。己は只この花を花輪にして、お前の髪に載せたらどんな工合だらうかと思つたのだ。

モデル。（花をいぢりつゝ。）さうしてかいて見ようとお思ひなすつたの。

畵家。　まあ、さう思つたとしてな。お前にその花輪を戴かせて見た處が、ひどく映りが好かつたのだ。そこでかうと思つたが。

モデル。　え。

畵家。　かかうと思つたが、その時丁度かく氣になれなかつたとしよう。頭痛か何かするのだな。さうしたらお前はどうするい。

モデル。　待つてゐますわ。

畵家。　その内に日が暮れてしまつて、かけなくなつたらどうするい。

モデル。　そんならそのあしたまで待ちますわ。

畵家。　それでもお前の頭に丁度好い工合に載せた花輪が無駄になつて、あした載せたらもうそんな工合にはいかないかも知れない。さういふ事になつたら、お前はどうするい。

モデル。　そんならわたしは、花輪を頭に載せたまゝ、ぢつとしてそのあしたまで坐つてゐますわ。

畵家。　夜通しかい。

モデル。えゝ。

畫家。坐つてゐて居眠なんぞは出來ないのだぜ。居眠りなんぞをすると花輪が歪むからな。

モデル。居眠なんかしませんわ。

畫家。折角さうしてくれても、翌日になつて見れば、その花が萎んでゐるかも知れない。

モデル。（悲し氣に。）え。ほんにさうでございますね。萎んだ花は。

畫家。（背中を向けつゝ。）役には立つまい。

モデル。それはさうでございますとも。（間。娘はやはり花をいぢりゐる。）お孃さんはどうなさいましたの。まだ入らつしやいますの。

畫家。お孃さんかい。（突然立ち留り、娘を屹と見、早足に娘の傍に寄り、兩手を娘の肩に置き、娘を自分の方（向かせ、目と目を見合す。）マッシャ。お前かい。（娘は呆れて目を見張る。）お前はいつもこゝにゐるのだな。（娘は何事とも分らぬらしく、一歩退く。）うむ。そんな事をいつたつて、お前には分らない筈だつた。（手持無沙汰に、殆ど恐る恐る。）マッシャ。この花はお前に遣る。（娘は愈呆れ、何事とも辨へず、目を愈大きく見張る。畫家は何といはんかと、思ひ惑ふ樣子にて。）それからこの柑子もお前に遣る。そしてお前と一しよに食べようぢやないか。そしてな。これからは柑子が出るたびに、いつでもお前と一しよに食べようぢやないか。

モデル。（忽然と非常なる喜に打たるゝ樣子。）まあ、本當でございますか。

畫家。（娘を抱く。）己が惡かつた。勘忍してくれい。（娘は顏を畫家の胸に押付く。畫家は徐に娘の髮を撫づ。娘忽ち歡歎す。畫家小聲にて。）どうしたのだい。なぜ泣くんだい。

モデル。（泣笑。）でも又わたしの胸がこんなになつては、あなたがかかれないと仰やいますでせう。

畫家。（優しく。）ほんにお前は。

モデル。わたしは胸が一ぱいになつて、どう致して宜しいか分らないのですもの。（畫家徐に娘の前に跪き、娘を見上ぐ。娘兩手にて畫家の目を蔽ぎ、顏次第に晴やかになりて微笑み、少し苦情らしき調子にて。）あのわたしが待受けてゐましたのは、これまで幾度だか知れなかつたのに、あなたは默つて入らつしやつたのですわ。それなのに、ひよんな時、出し抜けにこんな事を仰やるのですもの。○幕。）

現代思想

（對話）

森林太郎

太陽記者　こん度私共の方で出すやうになりました、あの家常茶飯の作者のライネル・マリア・リルケといふのは、あれは餘り評判を聞かない人のやうですが、一體どんな人ですか。

森　さうですね。私も好くは知りません。誰も好くは知りま

すまい。あなたが御存じのないのも御尤です。これまでの處では、履歷も精しくは公にせられてゐないのですから。

記者　併し少しは知れてゐませう。何處の人ですか。

森　ボヘミア人です。それだから、現に墺匈國の臣民になつてゐます。八つの橋をモルダウ河に渡して兩岸に跨がつてゐるプラハの都府で、幾百年かの舊慣に縛られてゐる貴族の家に、千八百七十五年十二月の九日に生れたといふことです。それですから、今年の十二月で滿三十三年になる。私なんぞよりは殆ど二十年も若い。倅に持つても好いやうな男です。家はケルンテンに代々土着してゐたといふことです。詩の中で「森のなかなる七つの城に、三枝に花を咲かせた」家だといつてゐます。思想も貴族的で、先祖自慢をする處が、ゴビノオやニイチエに似てゐますよ。肖像を見ると、われ〳〵日本人に餘り緣遠くない、細おもての容貌で、眼光が烱々としてゐるのです。其癖おとなしい人ださうです。寧女性的だといふことです。エルレン・ケイとひどく相獲てゐると見えますね。

記者　それでは交際が廣いのですね。

森　或意味では廣いと見えます。同臭のものを尋ねて歐洲大陸を半分位は歩いてゐませう。何でも親達は軍人にする積で、十ばかりの奴を摑まへてキインの幼年學校に入れたのださうです。處が規則で縛つて置きにくい性質なので、十五の時にとう〳〵幼年學校から退學してしまつたさうです。それから大學にはいつてゐたことがあるらしいのですが、其間の事は好くわかりません。旅行した國々はロシア、ドイツ、フランス、イタリアです。ロシア趣味はたつぷり其作品に出てゐます。優しい、情深い、それかと思ふと、忽然武士的に花やかになつて、時として殘酷にもなるやうな處がありました。そこをショパンの音樂のやうだと云つた人がありましたつけ。社會といふものに對する態度には、トルストイ臭い處もありますね。獨逸ではヲルプスエエデの畫かき村にはいり込んで、あそこの連中と心安くして、評論を書きました。都會嫌だから、伯林なんぞには足を留めないらしいのです。尤もハウプトマンは大好と見えます。フランスではロダンの爲事場に入り浸りになつてゐて、ロダンの評を書いたのですが、ロダンを評したのだか、自家の主觀を吐露したのだか分からないやうな、頗る抒情的な本になつてしまつたのです。兎に角おそろしい傾倒のしやうなのです。全く惚れ込んでゐるのです。イタリアでは就中エネチアが好なのです。今の大陸の歐羅巴は死んだ歐羅巴だといふので、生氣のあつた時代の遺蹟を慕つて、「過去の岸に沿うて舟を行る」といふのです。

記者　それでは畫家や彫塑家の評論を遺る外は大抵抒情詩を遺つてゐるのでせうね。

森　さうです。本領は抒情詩にあるのです。跡で著述目錄を御覽に入れませう。先頃我百首の中で、少しリルケの心持で作つて見ようとした處が、ひどく人に馬鹿にせられましたよ。

記者　小說はありませんか。

森　あります。短篇集を四冊出してゐます。尤も「可哀い神